

地域看護学

1 構 成 員

	平成 27 年 3 月 31 日現在	
教授	2 人	
病院教授	0 人	
准教授	1 人	
病院准教授	0 人	
講師（うち病院籍）	0 人	(0 人)
病院講師	0 人	
助教（うち病院籍）	3 人	(0 人)
診療助教	0 人	
特任教員（特任教授、特任准教授、特任助教を含む）	0 人	
医員	0 人	
研修医	0 人	
特任研究員	0 人	
大学院学生（うち他講座から）	0 人	(0 人)
研究生	0 人	
外国人客員研究員	0 人	
技術職員（教務職員を含む）	1 人	
その他（技術補佐員等）	0 人	
合計	7 人	

2 教員の異動状況

異あさみ	（教授）	（H16.4.21～現職）
鈴木みずえ	（教授）	（H20.8.1～現職）
大塚敏子	（准教授）	（H20.4.1～ 講師、H24.8.1～現職）
水田明子	（助教）	（H20.4.1～現職）
佐野雪子	（助教）	（H27.4.1～現職）
山岸暁美	（助教）	（H26.4.1～現職）

3 研究業績

数字は小数2位まで。

	平成26年度	
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	17 編	(8 編)
そのインパクトファクターの合計	51.62	
(2) 論文形式のプロシーディングズ及びレター	0 編	
そのインパクトファクターの合計	0.00	
(3) 総説数（うち邦文のもの）	16 編	(16 編)
そのインパクトファクターの合計	0.00	
(4) 著書数（うち邦文のもの）	4 編	(4 編)
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	0 編	(0 編)
そのインパクトファクターの合計	0.00	

(1) 原著論文（当該教室所属の者に下線）

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

- 鈴木みづえ, 丸岡直子, 加藤真由美, 平松知子, 谷口好美, 小林小百合, 岡本恵理, 水谷信子, 泉キヨ子, 高原昭, 赤井信太郎, 住若智子, 古田良江, 臨床判断プロセスを基盤とした認知症高齢者の転倒予防看護質指標の有用性 急性期病院と介護保険施設の比較による検討, 老年看護学, 19(1), 43-52, 2014. 【0.00】
- 鈴木みづえ, 古田良江, 高井ゆかり, 佐藤文美, 大城一, 山本則子, 金森雅夫, 認知症高齢者における疼痛の有症率と疼痛が認知症の行動・心理症状(BPSD)に及ぼす影響, 老年看護学, 19(1), 25-33, 2014. 【0.00】
- 鈴木みづえ, 山岸暁美, 玉田田夜子, 阿部慈美, 村田康子, 桑野康一, グレゴリー・オーダウド, 水野裕, 急性期医療における認知症高齢者のための看護実践の方向性 パーソン・センタード・ケアを目指した教育プログラムによる検討, 日本認知症ケア学会誌, 13(4), 749-761, 2015. 【0.00】
- 山岸暁美, 久部洋子, 山田雅子, 高橋則子, 福井小紀子, 石渡リキ. 在宅の視点のある病棟看護尺度の開発. 看護管理 25(3).248-254. 2015, 【0.00】
- Yamagishi A, Sato K, Miyashita M, Shima Y, Kizawa Y, Umeda M, Kinoshita H, Shirahige Y, Akiyama M, Yamaguchi T, Morita T. Changes in quality of care and quality of life of outpatients with advanced cancer after a regional palliative care intervention program. J Pain Symptom Manage. 48(4):602-610. 2014 【IF3.24】
- Yamagishi A, Morita T, Kawagoe S, Shimizu M, Ozawa T, An E, Kobayakawa M, Tsuneto S, Shima Y, Miyashita M. Length of home hospice care, family-perceived timing of referrals, perceived quality of care, and quality of death and dying in terminally ill cancer patients who died at home. Support Care Cancer. 23(2):491-499. 2015 【IF:2.65】

7. **Yamagishi A**, Morita T, Kawagoe S, Shimizu M, Ozawa T, An E, Kobayakawa M, Tsuneto S, Shima Y, Miyashita M. Talking about Home Hospices with Terminally Ill Cancer Patients - A Multicenter Survey of Bereaved Families. *Cancer & Chemotherapy*. Mar;42(3):327-33 2015 **【0.00】**

インパクトファクターの小計 **【5.89】**

- B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）
- C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの
1. Hiruta S, Shimaoka M, **Tatsumi A**, Ono Iida T, Horu F: Relationship between an amount of Key Tasks and Job Satisfaction among Caregivers and Nurses in Elderly Care Facilities, *Annals of Occupational and Environmental medicine*,26:24,1-5,2014. **【0.00】**
 2. Kato A, Sakakibara H, Tsuboi H, **Tatsumi A**, Akimoto M, Shimoi K, Ishii T, Kaneko H, Nakamura T, Ohashi N: Depressive symptoms of female nursing staff working in stressful environments and their association with serum creatine kinase and lactate dehydrogenase –a preliminary study, *BioPsychoSocial Medicine*,8:21,2014. **【0.00】**
 3. 牧野忍, 巽あさみ, 大塚敏子: ネグレクト家庭の不登校児童に関する小学校教諭の支援経験, *日本地域看護学会誌*,17 (3) ,60-69,2015. **【0.00】**
 4. Takai Y, Yamamoto-Mitani N, Abe Y, **Suzuki M**, Literature review of pain management for people with chronic pain, *Japan Journal of Nursing Science* 2014 DOI: 10.1111/jjns.12065 **【0.00】**
 5. 藤原美由紀, 三枝智宏, 鈴木みずえ, 一般病院に入院する高齢患者の認知症の行動・心理症状と心身機能が心身ケア依存度に及ぼす影響, *日本認知症ケア学会誌*, 13(4), 719-728, 2015. **【0.00】**
 6. 古田良江, 鈴木みずえ, 高井ゆかり, 在宅高齢者の痛みと健康関連 QOL の関連と痛み緩和対策の実態, *日本早期認知症学会誌*, 7(2) , 26-35, 2014. **【0.00】**
 7. 古田良江, 鈴木みずえ, 高井ゆかり, 在宅虚弱高齢者である二次予防事業参加者の疼痛有症率と疼痛の状況が健康関連 QOL に及ぼす影響, *老年看護学*, 18(2), 48-57, 2014. **【0.00】**
 8. Kinoshita H, Maeda I, Morita T, Miyashita M, **Yamagishi A**, Shirahige Y, Takebayashi T, Yamaguchi T, Igarashi A, Eguchi K. Place of death and the differences in patient quality of death and dying and caregiver burden. *J Clin Oncol*. 1;33(4):357-363. 2015 **【IF:17.96】**
 9. Morita T, Miyashita M, **Yamagishi A**, Akiyama M, Akizuki N, Hirai K, Imura C, Kato M, Kizawa Y, Shirahige Y, Yamaguchi T, Eguchi K. “Effects of a programme of interventions on regional comprehensive palliative care for patients with cancer: a mixed-methods study”. *Lancet Oncol*. 14(7):638-646. 2014 **【IF:25.12】**

10. Morita T, Sato K, Miyashita M, Yamagishi A, Kizawa Y, Shima Y, Kinoshita H, Suzuki S, Shirahige Y, Yamaguchi T, Eguchi K. Does a regional comprehensive palliative care program improve pain in outpatient cancer patients? Support Care Cancer. 22(9):2445-455. 2014 **【IF2.65】**

インパクトファクターの小計 [45.73]

(2-1) 論文形式のプロシーディングズ

(3) 総 説

- A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの
1. 鈴木みずえ, 認知症高齢者のもてる力を引き出す看護 認知症のパーソン・センタード・ケア, 老年看護学, 19(1), 14-18, 2014.
 2. 鈴木みずえ, 山本則子, 高井ゆかり, 古田良江, 鈴木有希, 金森雅夫, 認知症高齢者の痛みに関するアセスメントツールとケア介入, 日本早期認知症学会誌, 7(1), 53-58, 2014.
 3. 鈴木みずえ, パーソン・センタード・ケアの理論と実践 パーソン・センタード・ケアの理念と認知症ケアマッピング(DCM), 日本早期認知症学会誌, 7(1), 44-52, 2014.
 4. 鈴木みずえ, 金森雅夫, 認知症高齢者の転倒予防におけるエビデンスの基づくケア介入, 日本転倒予防学会誌, 1(3), 3-9, 2015
 5. 鈴木みずえ, 認知症基礎講座 疾患の理解と病態対応 病態に沿った検査の理解、対策とその手技 老年期の転倒と転倒防止対策, 日本早期認知症学会誌, 7(2), 116, 2014.
 6. 鈴木みずえ, 【施設内教育による安心安全な体制づくり 転倒・転落事故の予防と対策】 徘徊の多い認知症高齢者の転倒予防 パーソン・センタード・ケアの視点から, 高齢者安心安全ケア: 実践と記録, 11(6), 26-32, 2014.
 7. 鈴木みずえ, 【認知症・小児・精神看護に役立つ! 手で"触れて"痛み・苦しみを緩和する はじめてのタクティールケア】 (第1章)タクティールケアの意義 タクティールケアで地域・在宅のナースができること, コミュニティケア, 16(13), 014-020, 2014.
 8. 鈴木みずえ, 【転倒予防-これまでとこれから-】 認知症高齢者の転倒予防 認知症高齢者の転倒の特徴と予防対策, Modern Physician, 34(10), 1179-1183, 2014.
 9. 鈴木みずえ, 実践から学ぶ認知症の方へのリスクマネジメント利用者同士の事故に関するリスクマネジメント, 認知症ケア最前線, 46, 129-132, 2014.
 10. 鈴木みずえ, 実践から学ぶ認知症の方へのリスクマネジメント帰宅願望・徘徊・行方不明のリスクマネジメント, 認知症ケア最前線, 49(7), 97-100, 2015
 11. 鈴木みずえ, 実践から学ぶ認知症の方へのリスクマネジメント誤嚥・窒息のリスクマネジメント, 認知症ケア最前線, 45, 117-121, 2014.
 12. 鈴木みずえ, 実践から学ぶ認知症の方へのリスクマネジメント転倒に関するリスクマネジメント, 認知症ケア最前線, 44, 125-128, 2014.
 13. 鈴木みずえ, 実践から学ぶ認知症の方へのリスクマネジメント誤薬に関するリスクマネジメント, 認知症ケア最前線, 47, 101-104, 2014.
 14. 鈴木みずえ, 実践から学ぶ認知症の方へのリスクマネジメント「物がなくなった」ことについてのリスクマネジメント, 認知症ケア最前線, 48, 116-119, 2014.

15. 山岸暁美, 志真泰夫. 【死が近づいた時の症状マネジメント-質の高いエンドオブライフ・ケアを実現するために】 死が近づいた時の症状マネジメントの重要性,緩和ケア. 24(4),256-260. 2014
16. 山岸暁美, 久部 洋子, 山田 雅子, 高橋 則子, 鎌田 良子, 福井 小紀子, 石渡 リキ. 在宅に移行する際に必要な視点 一般病棟の看護師が行う退院支援.ナーシング・トゥデイ. 29(3)21-25. 2014

インパクトファクターの小計 [0.00]

- B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの(学内の共同研究)
- C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの

(4) 著 書

- A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの
1. 巽あさみ: 睡眠保健指導マニュアル, (社) 日本家族計画協会, 東京, 2015
 2. 鈴木みづえ: 認知症の介護に役立つ ハンドセラピー, 池田書店, 2014
- B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの(学内の共同研究)
- C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの
1. 鈴木久美, 野澤明子, 森一恵(編), 鈴木久美, 森一恵, 今戸美奈子, 大鳥富美代, 木下幸代, 野澤明子, 巽あさみ, 鈴木智津子, 小江奈美子, 中川理恵, 高橋正子, 他: 成人看護学 慢性期看護 社会資源の活用, 南江堂, 2015, 東京
 2. 柳川洋, 尾島俊之, 北村邦夫, 中村好一, 倉田貞美, 近藤今子, 巽あさみ, 千原泉, 坪井聡, 中村美詠子, 西山慶子, 原岡智子, 水田明子, 渡辺晃紀(五十音順): 保健指導ノート 産業保健, (社) 日本家族計画協会, 東京, 2015

(5) 症例報告

4 特許等の出願状況

	平成 26 年度
特許取得数 (出願中含む)	0 件

5 医学研究費取得状況

(万円未満四捨五入)

	平成 26 年度	
(1) 文部科学省科学研究費	10 件	(732 万円)
(2) 厚生労働科学研究費	2 件	(125 万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0 件	(0 万円)
(4) 財団助成金	0 件	(0 万円)
(5) 受託研究または共同研究	2 件	(0 万円)
(6) 奨学寄附金その他 (民間より)	0 件	(0 万円)

(1) 文部科学省科学研究費

1. 巽あさみ (研究代表者) 基盤研究(C), 職域のうつ病、自殺を予防するための睡眠保健指導 ICT システムの開発、平成 25 年～28 年度、平成 26 年度,78 (万円)
2. 巽あさみ (研究分担者) 基盤研究(C), ストレスと睡眠の質や量、健康感のメカニズムに関する 生理機能からのアプローチ、平成 26 年～平成 28 年、平成 26 年度,16 (万円)
3. 巽あさみ (分担研究者) 基盤研究(C), 発達障害児の養育者に対する保健師および保育士の支援実態と相互役割期待、平成 24 年～26 年度、平成 26 年度,5 (万円)
4. 鈴木みずえ (研究代表者), 基盤研究 (B), 認知症高齢者の転倒予防看護質指標による看護介入プログラムと実践継続システムの開発, 300万円 (継続)
5. 鈴木みずえ (研究代表者), 挑戦的萌芽, 看護師が困難と感じる認知症の行動心理症状の明確化と急性期認知症の看護モデルの開発, 128万円 (継続)
6. 鈴木みずえ (研究分担者), 基盤研究 (B), 長期療養施設における疼痛ケアの質向上のための教育プログラム開発, 研究代表者 山本則子, 50万円 (継続)
7. 鈴木みずえ (研究分担者), 基盤研究 (B), 臨床判断能力育成を包括した転倒予防のコンピューターシュミレーションプログラムの開発, 研究代表者 加藤真由美, 15万円 (継続)
8. 大塚敏子 (研究代表者), 基盤研究 (C), 発達障害児の養育者に対する保健師および保育士の支援実態と相互役割期待、平成24年～26年度、平成26年度: 35 (万円)
9. 大塚敏子 (研究代表者), 基盤研究 (B), メタボリックシンドロームのリスクをもつ成人への費用対効果の高い保健指導の開発、平成26年～28年度、平成26年度: 20 (万円)
10. 水田明子 (研究代表者) 基盤研究(C), 中学生の抑うつと家族機能及びソーシャルサポートの関連, 85万円(継続)

(2) 厚生労働科学研究費

1. 巽あさみ (研究分担者) 健康日本 21 (第 2 次) に即した睡眠指針への改訂に資するための疫学研究(H-25-循環器等 (生習) -一般-007)、平成 25 年～28 年、平成 26 年度,70 (万円)
2. 鈴木みずえ(研究分担者): 介護施設、一般病院における認知症 BPSD 初期対応の効果検証に関する研究,研究代表者 服部英幸 (長寿医療センター) ,55 万円 (継続)

(3) 他政府機関による研究助成

(4) 財団助成金

(5) 受託研究または共同研究

1. 山岸暁美 千葉県松戸市医師会、松戸市教育委員会、松戸市による健康啓発事業
2. 山岸暁美 日本プライマリ・ケア連合学会 PSI-HC 開発研究事業

6 新学術研究などの大型プロジェクトの代表, 総括

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0 件	3 件
(2) シンポジウム発表数	0 件	1 件

(3) 学会座長回数	0 件	7 件
(4) 学会開催回数	0 件	1 件
(5) 学会役員等回数	0 件	19 件
(6) 一般演題発表数	0 件	

(1) 国際学会等開催・参加

(2) 国内学会の開催・参加

1) 主催した学会名

1. 鈴木みずえ 第 19 回日本看護研究学会学術集会東海地方会学会

2) 学会における特別講演・招待講演

1. 巽あさみ これからの産業看護職に求められるもの～産業看護職の実践力向上を目指して～
日本産業衛生学会産業看護部会,2014.11.15,名古屋

2. 鈴木みずえ 認知症高齢者のもてる力を引き出す看護 認知症のパーソン・センタード・ケア
第 19 回日本老年看護学学術集会,2014.6.29, 名古屋

3. 鈴木みずえ 運動器看護学会に活かす パーソン・センタード・ケア, 第 14 回日本運動器看護学会学術集会,横浜、2014.6.7, 横浜

3) シンポジウム発表

1. 巽あさみ,勤労世代の不眠スクリーニングと睡眠保健指導支援システムを道板協働・連携,第 39 回日本睡眠学会,2014.7.3,徳島

4) 座長をした学会名

1. 巽あさみ 第 39 回日本睡眠学会

2. 巽あさみ 第 30 回日本産業ストレス学会

3. 巽あさみ 日本産業衛生学会平成 27 年度東海地方会学会

4. 鈴木みずえ 第 16 回日本認知症ケア学会

5. 鈴木みずえ 第 1 回日本転倒予防学会学術集会

6. 鈴木みずえ 第 40 回日本看護研究学会学術集会

7. 鈴木みずえ 第 34 回日本看護科学学会学術集会

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

1. 巽あさみ 日本地域看護学会 評議員、査読委員

2. 巽あさみ 日本産業衛生学会 代議員

3. 巽あさみ 日本産業衛生学会 就労女性健康研究会 WG

4. 巽あさみ 日本産業衛生学会 産業看護部会 幹事

5. 巽あさみ 日本産業衛生学会 東海地方会 理事、職場ストレス研究会 WG

6. 巽あさみ 日本産業ストレス学会 評議員、産業看護職委員会委員長

7. 巽あさみ 日本看護医療学会 理事 評議員 査読委員

8. 巽あさみ 日本産業看護学会 理事 編集委員長

9. 巽あさみ 東海公衆衛生学会 評議員

10. 鈴木みずえ 日本看護研究学会 理事・査読委員・東海地方会世話人

11. 鈴木みずえ 日本老年看護学会 評議員

12. 鈴木みずえ 日本老年看護学会 第 19 回日本老年看護学会学術集会企画委員
13. 鈴木みずえ 日本認知症ケア学会 評議委員・査読委員・東海部会委員
14. 鈴木みずえ 日本認知症ケア学会 第 16 回日本認知症ケア学会企画委員
15. 鈴木みずえ 日本看護科学学会 第 34 回日本看護科学学会学術集会企画委員会
16. 鈴木みずえ 日本転倒予防学会 副理事長 学会誌編集委員
17. 鈴木みずえ 日本早期認知症学会 理事
18. 大塚敏子 第三回日本公衆衛生看護学会 実行委員
19. 山岸暁美 日本早期認知症学会 学術誌編集委員

8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数（レフリー数は除く）	0 件	0 件

(1) 国内の英文雑誌等の編集

(2) 外国の学術雑誌の編集

(3) 国内外の英文雑誌のレフリー

1. 鈴木みずえ 1 回 American Journal of Alzheimer's Disease and Other Dementias (USA) 【IF 1.77】
2. 鈴木みずえ 1 回 Geriatrics and Gerontology International (日本)
3. 鈴木みずえ 1 回 Japanese Journal of Nursing Science (日本)
4. 鈴木みずえ 1 回 Tohoku Journal of Experimental Medicine (日本) 【IF 1.28】
5. 山岸暁美 3 回 Support Care Cancer. (USA) 【IF2.65】
6. 山岸暁美 2 回 J Pain Symptom Manage. (USA) 【IF3.24】

9 共同研究の実施状況

	平成 26 年度
(1) 国際共同研究	1 件
(2) 国内共同研究	10 件
(3) 学内共同研究	1 件

(1) 国際共同研究

1. 鈴木みずえ アジアの認知症の国際比較研究 中国,韓国,タイ,ベトナム,平成 26 年～28 年度

(2) 国内共同研究

1. 巽あさみ 職域のうつ病、自殺を予防するための睡眠保健指導 ICT システムの開発
平成 25 年～28 年度
2. 巽あさみ ストレスと睡眠の質や量、健康感のメカニズムに関する生理機能からのアプローチ
平成 26 年～平成 28 年
3. 巽あさみ 健康日本 2 1 (第 2 次) に即した睡眠指針への改訂に資するための疫学研究
平成 25 年
4. 鈴木みずえ 認知症高齢者の転倒予防質評価指標による看護介入プログラムと実践継続システムの開発 平成 26 年～30 年度

5. 鈴木みずえ 臨床判断能力を包括した転倒予防のシュミレーションプログラムの開発 平成23年～27年度
 6. 鈴木みずえ 急性期病院における認知症看護モデルの開発 平成23年～26年度
 7. 鈴木みずえ 長期療養施設における疼痛の訴えの認知症高齢者の痛みの実態に関する質的研究 平成23年～27年度
 8. 鈴木みずえ 介護施設、一般病院における認知症 BPSD 初期対応の効果検証に関する研究 平成23年～27年度
 9. 山岸暁美 Child to Community アプローチによる住民意識の変化 平成26年～平成31年
 10. 山岸暁美 在宅療養者の肺炎重症度尺度 PSI-HC の開発と信頼性・妥当性の検証 平成26年～平成28年
- (3) 学内共同研究
1. 巽あさみ 発達障害児の養育者に対する保健師および保育士の支援実態と相互役割期待 平成24年～平成26年

10 産学共同研究

	平成26年度
産学共同研究	0件

11 受賞

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

・巽あさみ

- 日本の現役世代の自殺を予防するため、睡眠を切り口としたメンタルヘルス対策をめざし、保健師等に対して適切な保健指導システムを開発することを目的とした研究である。本期間中においては、2社の従業員に対して睡眠状況調査と睡眠問題ハイリスク者に対する介入研究を実施した。専属産業医等が配置されていない事業場における研究の実践であることから、今後中小企業における睡眠問題の解決方法について示唆が得られると期待できる。(巽あさみ,小林章雄)
- 厚生労働科研：日本国民に対して睡眠の基礎知識の普及や専門家に対する保健指導の実践力向上に関する研究である。睡眠の知識や、保健指導能力を普及していくために、国民向けリーフレット「ぐっスリープガイド」、専門家向け保健指導の手引き、手引きの活用効果を高める教材案の作成を行った。その信頼性・妥当性検証のための研究を実施し、平成27年度中に完成する予定である。これらのリーフレットや教材は最終的には厚生労働省のHPにupされる予定であり、睡眠の正しい知識の普及と睡眠問題の改善に役立つことが可能となる。(巽あさみ,兼板佳孝,尾崎章子他)

・鈴木みずえ

- アジアの認知症高齢者の徘徊などの心理行動学的徴候と関連要因の国際疫学調査
日本が経験している急速な少子高齢化の人口学的変化は、他のアジア諸国でもみられるようになり、韓国・台湾などは日本よりもさらに短い期間で高齢化社会へ突入することが予想される。認知症患者の症状のなかでも特に、徘徊、興奮、暴力などの周辺症状は、行動心理学的兆候(Behavioral

Psychological Symptoms of Dementia, BPSD)と呼ばれ対処が困難である。BPSD は環境や文化的要因に影響されると言われているが、国際的に BPSD の発生頻度や関連要因を比較した研究はない。本調査は上記のアジアの5か国と日本国内の調査を比較して実施する予定であり、研究フィールドの調整や調査表について検討した。(鈴木みずえ, 牧本清子, 山川みやえ)

- 認知症高齢者の転倒予防質評価指標による看護介入プログラムと実践継続システムの開発
介護保険施設における認知症高齢者の転倒予防の看護実践の専門性の向上を目的に看護介入プログラムと実践継続システムの文献レビューと介入プログラムを検討した。(鈴木みずえ, 泉キヨ子, 谷口好美, 加藤真由美, 平松知子, 丸岡直子, 寺井梨恵子, 島田裕之, 六角僚子, 小林小百合, 関由香里)
- 臨床判断能力を包括した転倒予防のシュミレーションプログラムの開発
看護師の転倒予防に関する臨床判断能力を向上させるための転倒予防のシュミレーションプログラムの内容を検討し、看護師によるインターネットによる自己学習プログラムの開発に取り組んだ。(鈴木みずえ, 加藤真由美)
- 急性期病院における認知症看護モデルの開発
急性期病院における認知障害高齢者の看護尺度を開発し、因子分析の結果、4因子となり、パーソン・センタード・ケアの理念の4つの内容信頼性・妥当性に関して検討した。(鈴木みずえ, 吉村浩美)
- 長期療養施設における疼痛の訴えの認知症高齢者の痛みの実態に関する質的研究
疼痛の訴えのある認知症高齢者に対してインタビュー調査を実施し、痛みの原因は過去の疾患による痛みや記憶として残っている痛みの経験による影響が絡んでいることや対人関係のストレス、季節・天候の変化により影響があることを明らかにした。(鈴木みずえ, 山本則子, 高井ゆかり)
- 介護施設、一般病院における認知症 BPSD 初期対応の効果検証に関する研究
認知症高齢者の BPSD の実態と認知症高齢者のケア依存度と ADL や BPSD の関係について、パス解析では、ケア依存度は ADL と NPI 「J.異常行動」から有意に影響を受けて、QOLD の「自分らしさの表現」に影響を与えていた。認知症高齢者の BPSD 緩和に対するケアを実施することで、ケア依存度が改善し、自分らしさの表現などの QOLD が向上することが示唆された。(鈴木みずえ, 服部英幸)

・大塚敏子

- 発達障害児の養育者に対する保健師および保育士の支援実態と相互役割期待
「発達障害があると思われるが診断はされていない子ども」を持つ養育者に対する保健師および保育士の支援実態および両職種の連携について研究を行っている。現在までに保育士 12 名、保健師 10 名へのインタビューを実施した。保育士へのインタビュー内容の分析の結果、500 のコードが抽出され、97 サブカテゴリ、31 カテゴリ、7 コアカテゴリを形成した。養育者への支援において保育士ははじめ【核心を伝える下準備としての養育者への日々のアプローチ】をして養育者との関係づくりをしながら【伝え方やタイミングを見極めた上での養育者への気づきの促し】をしていたが、支援の節目となる発達相談の勧奨といった場面では【養育者の子どもを思う気持ちに沿った専門的支援の勧奨】で養育者が専門的支援に一步踏み出せるよう配慮していた。一方これらの支援においては【養育者の抵抗感や困り感のなさへの強い困難感と専門家支援の必要性】を感じており、【情報共有や助言を得ることによる保育士自身の安心感と支援進展】を経験していた。また、養育者支援において連携する職種である【保健師との薄い関係性感知と支援役割への疑問】がある一方、【保健師の機能を発揮して同じ方向性で養育者を支援するパートナーとしての役割を期待】していた。現在、保健師のインタ

ビュー結果の分析中である。(大塚敏子、巽あさみ)

・水田明子

- モンゴルの教育事情と母子保健について、モンゴルの国立教育大学教授、障がい児の親の会代表、視覚障がいのある母親と JICA 青年海外協力隊のスキームで派遣された保健師にインタビュー調査を行った。モンゴルでは 1991 年に始まった市場経済化により大規模な経済格差や生活様式の変化が子どもの教育やメンタルヘルスに影響を及ぼしているが、子どものメンタルヘルスの問題はまだ未着手である。そのため、モンゴル人研究者の協力を得て、申請者らが平成 24 年度に日本の中学生に行った中学生の心の健康調査をモンゴル人生徒にも実施することを検討し、質問紙票の作成を行った。(水田明子、巽あさみ、尾島俊之)

・山岸暁美

- PSI-HC 開発
在宅療養者や高齢者施設における診療に際し、肺炎の重症度や予後予測は、患者本人および家族介護者への説明や入院治療を希望するかの意思決定に非常に重要な情報であるにもかかわらず、これを客観的かつ簡便に評価する指標については、国内外ともに存在しない。したがって本研究事業は、患者背景と理学所見から成る肺炎の重症度および予後予測の評価ツール (PSI-HC) の信頼性・妥当性を、多施設において前向きに検証することを目的としている。現在、全国 10 か所の機能強化型在宅療養支援診療所にて、データ収集中である。また次のステップとして、どのように多職種がこの PSI-HC を利用し、在宅医療、高齢者施設の場でコミュニケーションを取り、患者及び家族の意思決定支援を行ったかの事例を収集し、「多職種による PSI-HC 運用マニュアル」を作成する予定である(山岸暁美、川越正平、平原左斗司、木村琢磨他)。

- 健康啓発事業

国策でもある地域包括ケアシステム構築の基盤となるソーシャルキャピタルの蓄積や住民の自助・互助・共助・公助に対する認識は、自らの健康や疾患の予防に関する考え方、死生観、地域とのつながりなど、幼い頃からの教育や体験による価値観形成に依るところが大きい。

地域のプライマリ・ヘルスケアを担っている地区医師会が、いのちの尊さや医療・介護の仕事の重要性、そして地域のつながりの価値を含む小中学生に対する健康教育を担うことは、地域全体の地域のソーシャルキャピタルの蓄積や自助・互助・共助の重要性に関する認識の向上に貢献し得るのではないかと考える。したがって本事業は、我々が提唱する Child-to-Community の理念に則り、地区医師会が地域包括ケアシステム構築に資する出前講座を市内小中学校で実施し、子供たちの健康や地域に対する関心を高めると同時に、その波及効果によって地域社会全体の関心をも高めていくことを目的とする。現在、教育委員会と協働しながら、講座資料を作成中である。また 5 年間の介入前後で、住民のソーシャルキャピタルの蓄積や住民の自助・互助・共助・公助に対する認識が変化するかについて、松戸市と協働しながら調査を進めているところである(山岸暁美、松戸市医師会、松戸市教育委員会、松戸市)。

13 この期間中の特筆すべき業績, 新技術の開発

14 研究の独創性, 国際性, 継続性, 応用性

15 新聞, 雑誌等による報道

1. 鈴木みずえ 2014年7月20日 NHK 総合、NHK スペシャル"認知症800万人"時代 認知症をくい止めろ～ここまで来た！世界の最前線～ 21:00～21:58
2. 鈴木みずえ 2014年9月28日 21:00～22:54 BS-TBS 週刊報道部 スウェーデン発 認知症ケア
3. 鈴木みずえ 2014年9月5日、週刊朝日「体にふれるケアの効果:徘徊の防ぎ方&見つけ方」p.38-41
4. 鈴木みずえ, 2015年2月1日、Rec-site (レクサイト)「不安をやわらげ、認知症の症状緩和に役立つ「タクティールケア」のすすめ, 8, p.13-16